

健やか ぐんま

Sukoyaka Gunma

vol. 23

2019. 冬

Winter!

特集

P2-5

「現代における結核問題」

- 群馬県の結核の現状と取り組み(群馬県保健予防課)
- 複十字シール運動について
- カンボジア結核対策スタディツアー2018報告

財団からのお知らせ P6-8

- RFLJ2018ぐんま最終報告
- 乳がん検診車がデジタル化になります
- 健康づくり研究助成「あさを賞」採用者が決定しました
- 視察見学の受け入れについて
- 平成30年度群馬県地域保健研究発表会のご案内



群馬県の結核の

現状と取り組み

群馬県保健予防課

結核とは

結核とは、結核菌によって起こる感染症です。結核菌の感染は、肺結核患者が咳などにより空気中に放出した結核菌を吸い込むことによって起こります。

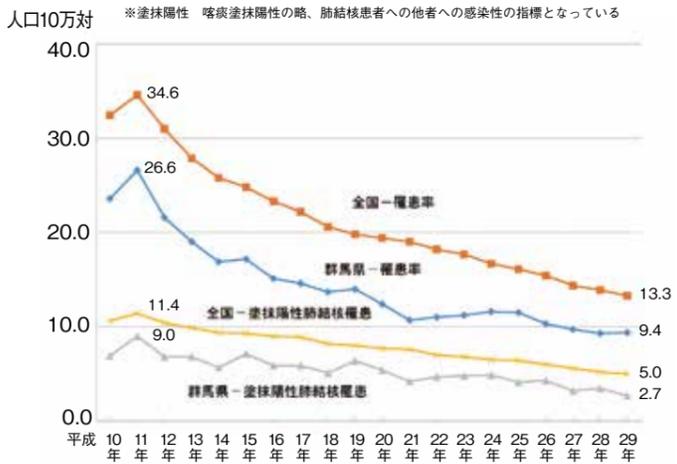
結核菌は、表面がロウ状の物質でできた丈夫な膜で覆われていて、直射日光には弱いですが冷暗所では3〜4か月生存可能です。しかし、結核菌の感染のほとんどが呼吸器からの感染のため、菌が空气中を漂っていなければ感染は起こらず、床やテーブルなどに落ちた結核菌は感染を起こさないとされています。

日本の結核の推移（歴史）

日本における結核は、戦中戦後大まんに延び、亡国病と恐れられました。昭和26

年に結核予防法が制定されて以来、国を挙げて強力に結核対策が進められ、医学の進歩、公衆衛生水準の向上によりその罹患率（1年間に人口10万人あたり新たに結核を発病する者）は順調に低下しました。しかし、平成9年に罹患率が再び増加に転じたことを受けて、国は「結核緊急事態宣言」を発表し、「結核はまだある」ということを国民及び医療従事者に対して周知しました。その後、罹患率は速やかに減少に転じ、推移しています。全国の結核患者数は年間約1万7千人（平成29年の罹患率13.3）発生しており、依然として我が国最大級の慢性感染症で

罹患率—塗抹陽性*肺結核罹患率年推移



新登録患者数—塗抹陽性*肺結核患者割合年次推移



あることには変わりません。また、日本は未だ中まん延国に位置づけられており、患者の高齢化や、外国人結核患者の流入などの課題も抱えています。国は2020年までに罹患率10以下の低まん延国（世界保健機関（WHO）の定義する指標）となることを目標にしており、対策を一層強化しています。

群馬県の結核の現状

群馬県の平成29年の結核患者数は184人、罹患率は9.4で既に低まん延化を達成しています。しかし、患者の減少率は非常に低い状況で、また高齢者施設などにおける集団感染事例の発生など新たな課題も見られます。結核の集団感染については、平成24年から平成28年の5年間で4件の発生があり、いずれも受診や診断の遅れが原因で、早期受診と早期治療

に課題が残ります。本県における結核患者は、全国と同様で高齢者が中心ですが、合併症を有する患者の増加が目立ちます。合併症により結核の治療がうまくいかず難治する事例も多く、さらに、新規結核患者に占める外国人の割合が全国1位（約17%）であり、文化・宗教や言葉の問題など、外国人患者に対する課題がクローズアップされています。近年、国際交流の進展に伴い、結核高まん延国から入国した方が発病する例が増加しており、海外の動向にも目を向ける必要があります。本県では、こうした新たな局面を迎えた結核対策を、効果的、総合的に推進す

結核の予防

結核菌に感染した人のうち発病は1割程度で、さらに重症化しなければ人につくさないことから、結核の最大の予防は早期受診、早期治療と言えます。毎年定期的に健診を受けることと、2週間以上咳やタンが続くようであれば医療機関を受診しましょう。

結核の治療

結核の治療は、通常複数の抗結核薬（3剤から4剤）を使用して行われます。それは薬剤耐性結核菌を作らないためです。結核は風邪などとは違い、症状がなくなっても一定期間（最短でも6か月）の服薬が必要です。そのため病院や保健所の職員、薬局の薬剤師等が服薬状況を確認しながら服薬終了まで見守ります。これをDOTS（ドッツ：directly observed treatment short-course：直接服薬確認療法）と呼んでいます。

結核は過去の病気と思われがちですが、毎年全国で1800人以上が結核によって亡くなっている現状を踏まえると、まだまだ油断はできない状況です。



複十字シール運動の使途 としての国際協力



カンボジア結核対策スタディツアー 2018

群桐エコロ株式会社 代表取締役 山口 博

複十字シール運動で生まれたカンボジア結核予防会(CATA)の視察・表敬訪問や各機関・施設を視察し、カンボジアの結核の現状を知ることで、日本国内における複十字シール募金の活性化につなげることを目的とした、今回で10回目となる「カンボジア結核対策スタディツアー」に初めて参加させて頂きました。

まず空港からホテルに向かう道中で高級車が非常に多く走っていることに衝撃を受けました。後に現地ガイドに聞いてみたら、貧富の差が激しいとのことで、1日3ドル程で生活している人もいれば、15万ドルもするような高級車が沢山走っているという不思議な光景でした。そしてバイクの多さにも驚きました。今にも接触事故が起こりそうな状態で大変な交通量でしたが、現地の方たちのある意味とても上手な運転によってバランスがとられているようでした。

さて、現地の様子ですが、まず台湾系の工場を訪問しました。ここでは約1,800人の社員(女性が90%)が働いており、CATAが結核予防の支援をしています。非常勤のドクターが1名と常勤のナースが2名で社員の健康面をサポートしていました。結核が疑われる初期症状と検査の実施について丁寧な掲示や周知がされており、結核患者は年間で1~2名とのことで取り組みの成果が出ているそうです。翌日は州病院とヘルスセンターに行って活動の説明を受け、施設見学をしました。各施設共に予算が無く、様々な苦勞をされていましたが、日本から寄贈された検査機器等をととても大切に使用していました。最終日はカンボジア国立医科大学と検診・検査センターを訪問・視察しました。大学では医学部長との有意義な意見交換ができたほか、今後の取り組みや望まれる関係性についても確認し合うことができました。検診・検査センターでは人間ドックができるとともに高度な設備を導入して様々な検査ができるようになっていました。施設の場所については大学が費用を負担し、設備機器は日本の結核予防会(JATA)が整備していました。

終わりに、発展途上にあるカンボジアは、他国からの盛んな投資などもあり、とてもエネルギーでした。今後の経済発展と併せて、公衆衛生やインフラの整備等が進むことで、より良い社会が築かれることを願っています。



カンボジア結核対策スタディツアー工場見学
(2列目1番右が山口博さん、2列目右から2番目が山口量子さん)



プノンペンの街なかの様子

複十字シール運動は、結核予防会及び各県支部が実施している、結核を中心とした胸の病気をなくし健康で明るい社会をつくるための運動です。その実現のために複十字シールを使った募金活動が行われ、益金は複十字シール募金支援事業として様々な事業に役立てられています。

そのひとつが結核対策国際協力事業です。世界では、発展途上国を中心に未だ結核がまん延しています。人々の4人に1人が結核に感染しており、その結果毎年1,040万人*が新たに結核を発病し、そのうち約170万人*が死亡すると推計されています。(※WHO2016年データ)

世界の結核問題はWHOの指定する30か国の結核高まん延国に集中しています。

結核予防会は、プロジェクトの実施やセミナーの開催、専門家による技術支援により、この結核高まん延国を中心に結核対策の推進を支援しています。

例えば、カンボジアという国は全結核罹患率が人口10万対326人で、結核高まん延30か国に指定されています。結核予防会では2005年からカンボジアの結核予防会と協力して、結核対策の共同プロジェクトを実施しています。

現在、プノンペン市において工場労働者を対象に、結核の診断と治療の促進のための支援を行っています。また2013年にはカンボジア結核予防会(CATA)へ検診車を寄贈し、日本の経験を生かした積極的な結核患者の早期発見(結核検診)を普及させるシステムを構築しています。

こういった国際協力事業を実際に視察し、今後の運動の活性化につなげるため、公益財団法人結核予防会では毎年「結核対策スタディツアー」を実施しています。

2018年のツアーには複十字シール運動に多年にわたって貢献されているとして、群馬県支部(群馬県健康づくり財団)からの推薦により、群桐エコロ株式会社 代表取締役の山口博さんと取締役 山口量子さんが参加されました。

複十字シールってなに？

複十字シール(ふくじゅうじしール)は公益財団法人結核予防会が募金活動のために作っているシールで1904年にデンマークで慈善募金運動のためにクリスマス・カードにシールを貼ったのが起源とされています。その当時、世界中で死亡原因上位とされていた結核を撲滅・予防するための募金手段として複十字シールが考案されました。日本では1952年(昭和27年)より結核予防会から発行されています。現在、世界中で多くの国が複十字シールを発行。



表敬訪問

去る8月1日(水)、平成30年度複十字シール運動開始にあたり、群馬県地域婦人団体連合会(結核予防婦人会)の関会長らと群馬県健康づくり財団が群馬県健康福祉部 川原部長を表敬訪問し、複十字シール運動へのご協力をお願いしました。



平成30年度健康づくり研究助成「あさを賞」 採用者決定しました

県民の健康増進又は疾病予防等健康づくりに役立つ調査研究に対して助成を行う健康づくり研究助成「あさを賞」の選考委員会が平成30年12月10日(月)に開催されました。

審査の結果、13課題の応募の中から、下記の8課題が採用されました。

氏名(所属)	研究課題
土屋 謙仕 (群馬大学大学院)	高齢者の日常的に実施可能な活動が精神機能に及ぼす影響の神経基盤を解明する研究
清水 洋生 (新島学園短期大学)	スクリーンタイムが幼児の体力・運動能力と生活習慣に与える影響
小笠原映子 (高崎健康福祉大学)	ケア情報共有のICT化に関する研究 —患者別【褥瘡ケア】手順書作成ツールの開発・評価—
高林亜希子 (高崎市医療介護連携相談センター)	在宅医療・介護連携推進事業研修会の効果について
岡崎 大資 (群馬パース大学)	介護予防事業の行動分析的マネジメントによる参加者の自主トレーニングと社会参加の促進
秋山 隆 (明和学園短期大学)	特定アレルギーフリー食品の利用及び抗アレルギー食品成分の探索
内林 由香 (群馬パース大学)	群馬県内における乳がん検診(マンモグラフィ)の実態調査
梅原 里実 (高崎健康福祉大学)	群馬県内における身体拘束をしないケアの実現に向けた取組みに関する研究～認定看護師教育課程から発信する研修～

(敬称略、順不同)

視察見学の受け入れについて

12月19日(水)、太田市健康推進協議会から健康推進員23名の方が群馬県健康づくり財団を視察見学に訪れました。当財団の概要説明を受けた後、館内や各検診車を視察、担当課長から各種検診検査について説明を受けました。

短い時間ではありましたが、群馬県健康づくり財団をより身近な存在と感じていただけるようになれば幸いです。

当財団では、各団体からの施設見学を受け入れていますので、下記までお気軽にお問い合わせください。

視察見学に関するお問い合わせ
027-269-7811
(総務部総務課)



リレー・フォー・ライフ・ジャパン2018ぐんま最終報告

前号でもお伝えしましたとおり、リレー・フォー・ライフ・ジャパン2018ぐんまが去る10月6日(土)～7日(日)に盛大に開催されました。2013年に初めて群馬で開催された本イベントは、会を重ねるごとに、規模が大きくなり、6回目となった今回は参加者数、参加チーム数ともに前年を大きく上回りました。また、企業・団体・個人の方から寄せられた協賛金・募金も過去最高額となりました。これらは実施経費を除いた全額が公益財団法人日本対がん協会に寄付され、様々ながん征圧活動に役立てられます。リレー・フォー・ライフ・ジャパン2018ぐんまにご参加、ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。来年もまた同じ場所でお会いしましょう。

開催 10月6日(土) 12:00～10月7日(日) 12:00
(ALSOK ぐんま総合スポーツセンターふれあいグラウンド)

参加者数 (2日間延べ人数) : 8,300人 (昨年7,800人)

リレーウォーク参加チーム数 87チーム (昨年76チーム)

募金総額 6,962,535円 (昨年6,182,801円)



全乳がん検診車、デジタル化します

乳がん検診車に搭載されているマンモグラフィ装置がデジタルに変わります。マンモグラフィ検査とは、乳房専用のエックス線検査を行う検査で、乳がんの早期発見に最も有効な画像診断のひとつです。今回のデジタル化により、画像をモニター上で読影しやすいように調節したり、過去の画像データと比較することもスムーズに出来、迅速な病変の発見が期待できます。

また撮影時間の短縮により、被ばく線量が低減できるというメリットもあります。

当財団が所有している3台の乳がん検診車が、これによりすべてデジタル化に整備されます。



平成30年度 (第6回) *

群馬県地域保健研究発表会の開催について

日時・会場 平成31年3月20日(水) 13:00~16:30
群馬県庁29階291会議室

この研究発表会は、研究発表を通じて保健衛生の向上を図り、県民の健康増進に寄与するため、また保健従事者の交流を目的として群馬県と当財団が主催するものです。

どなたでも聴講できますので、一般の方もぜひご来場ください。



NO	演 題	発 表 者
1	フレイル改善のための新しい取り組み ～ Community As Partner ; CAP を用いた地域フレイル予防活動の紹介～	高崎健康福祉大学大学院 解良 武士
2	住民主導型筋力トレーニング事業参加者における身体的フレイル、オーラルフレイルの関連	群馬大学大学院 山上 徹也
3	前橋市の健康増進対策に対する地区分析の重要性と地域健康格差を解消するための取り組み	前橋市健康部 小保方 翠
4	自宅近隣の生活環境は生活習慣病発症に影響を及ぼすか	群馬県健康福祉部 保健予防課 近藤 泰之
5	薬局における健康づくり教室「健康プラス教室」の取り組み～栄養ケアステーションの開設に向けて～	群馬県薬剤師会 小黒佳代子
6	官学連携による特定保健指導対象者への運動・栄養・食事支援 ～体重減少率と歩数変化・運動セルフエフィカシーの関係～	高崎健康福祉大学 田中 繁弥
7	高校生に向けた食育推進指導者用マニュアルの作成について	高崎市保健医療部 関口 美穂
8	喫煙に関する実態調査から得た知見について	東京福祉大学大学院 澤口 彰子
9	群馬県における自傷のおそれにより警察官通報になった者と他害のおそれにより警察官通報になった者の相違点	群馬県こころの健康センター 山崎 雄高
10	群馬県における自傷のおそれにより警察官通報になった者と自殺者の背景の比較	群馬県こころの健康センター 鈴木 紋子
11	BITおよびVital Link活用による心房細動の早期発見と、健康寿命への貢献	高崎健康福祉大学 大川喜代美
12	保健所機能を活かした在宅人工呼吸器装着者の安全確保の取り組み	前橋市保健所 大山ひとみ
13	リーフレット利用の乳児の運動発達支援における保健師の気持ちの変化	高崎市保健医療部 大谷三紀子
14	平成29年度学校歯科保健アンケート調査報告	渋川保健福祉事務所 星野 瑞穂
15	県内の蚊媒介感染症対策への取り組み	群馬県衛生環境研究所 高橋 裕
16	当施設における乳がん検診の現状と今後の課題	群馬県健康づくり財団 石川 瞳
17	リアルタイムPCR装置を用いた遺伝子検査の実施報告 ～検便のノロウイルスと食品の腸管出血性大腸菌～	群馬県健康づくり財団 鈴木 宏和
18	A市B地区のHbA1cと食生活習慣等との関連※	高崎市保健医療部 猪野 妙子
19	吾妻郡小中学校における歯みがき習慣実態調査について※	利根沼田保健福祉事務所 鈴木かおり

※誌上発表のみ

(敬称略、順不同)